

## 第5回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 令和元年 12 月 12 日（木）19 時～20 時 30 分
- ◇会場 次世代教員養成センター多目的ホール
- ◇参加者数 63 名
- ◇内容 「子どもの学びと先生のやる気に火をつける」  
講師：江東区立八名川小学校 前校長 手島 利夫 氏

### ○講演前のアクティビティ

教員にとっては、思考力・判断力・表現力を見極める力が大切である。

#### ・壁新聞のコンクールを例に

壁新聞を比較する視点

- 思考力・判断力・表現力 学習指導要領でこれから大事にしていこうとするところでもある
- 思考力に関して：それを自分なりに消化して、自分の学びの旅があるか
- 判断力に関して：判断のデータを自分で集めて、役立てているか
- 表現力に関して：伝えたい内容を的確に表現しているか
- 全体の印象：伝えたい内容を限られたスペースの中で工夫しているか

### 1. これから必要とされる教育について

保護者の願いは、健康で賢く、思いやりのある子になってほしい、しっかりした知識・学力も身につけてほしい、いい大学にも入れたいというものがある。このような一部の保護者の願いを受け、「徹底指導をします」、「わかるまで帰しません」といった、読み・書き・ソロバンのような基礎基本の徹底など、とにかく学力向上に走った学校もあった。

一方、ESD に取り組んだ学校では、学力学習状況調査の結果が大きく改善しているという事実がある。学力観の変化に、日本の学校が対応できていないのではないか。

尾木直樹氏：日本の教育は世界でどのようにみられているか。

- ・アジア大学ランキングでの位置が下がった。それは海外の国々が上がったから。
- ・アジアの各国は知識ベースの教育からコンピテンスベースの教育（21 世紀型）に切り替えた。
- ・日本は切り替えることができなかった。
- ・労働生産性でも上位国の半分程度になってしまっている（生産性の低い人たちの会社）。
- ・大学ランキングの低下は国際競争力の低下につながっている。
- ・過去型の学力から抜け出せないことが原因 国内に広がる貧困もその結果であろう。

社会そのものが変わってきた

- ・気候が変わってきた。東京で高潮発生時に海面より低いところに 290 万人が住んでいる
- ・温暖化が進んでいる。逃げ場はない。

→ 世界中が SDG s を達成してなんとかしようとなっている

世界の条件がかわればものごとの正解もどんどん変わる。求められる人間像も大きく変わってきて



いる。 → 日本の教育も変えなくてはならない。令和の時代は創造化・共生の時代である。

かつて、ゆとりの中で生きる力を育むと、国をあげて教育改革に取り組もうとした。そのシンボルとして総合的な学習の時間が開始された。しかし、学力低下批判・ゆとりをつぶせという逆風があり、総合的な学習の時間の授業間数が減少されつつある。令和となり、新学習指導要領の全面実施、大学入試改革として国語・数学の入試における論文の導入などが図られつつあるが、また同じ動きが見られる。マークシート方式の方が公平だというものだ。マークシートで出せるような答えしか書けない大学生にどんな価値があるのか。「世界のゴミ」と言われるかもしれない。昭和の学力がいつまで通用すると思っているのか。

## 2. カリキュラム・マネジメントについて

教育には、個人的側面と社会的側面の2つの役割がある。個人的側面とは、個人の成長を目的とし、自分のよさや可能性を認識できるようにすることである。一方、社会的側面とは、社会人としての役割を担う力を育てるものであり、持続可能な社会の創り手を育成することである。

新学習指導要領においても、「生きる力」を育むことは変わらない。文部科学省では次の3つを「生きる力」と定めている。

1. 課題解決に必要な思考力・判断力・表現力
2. 豊かな心や創造性
3. 健康



総則には、教育課程の編成において気をつけることとして、教育課程の実施において、総合との関連を図り、教科横断的に学ぶためのカリキュラム・マネジメントの重要性が指摘されている。また、授業改善の方向性として、主体的対話的で深い学び、探究的・問題解決的な学びが指摘されている。カリキュラム・マネジメントとは各教科を総合で横ぐしをいれて、つなぐことだ。将来どうやって生きようか(12年後の私)という、キャリア教育との接続も視野に、カリキュラムをつないで楽しい学びにすることがカリキュラム・マネジメント(チームでやる)である。特に中学校では教科の壁を切り崩す必要があるだろう。

また、視点を持ってつなぐことも重要だ。八名川小学校では、環境、国際的な教育システム、多文化理解、人権・命の教育の4つの視点でつないでいる。ESDカレンダーは作成することが目的化してはいけない。ESDカレンダーと具体的な指導計画をセットにすることが重要だ。実際に授業実践をしながら作っていく。1年にいくつもの単元開発できるはずがない。無理を強いたらよそのESDカレンダーをコピーして、内容のともないものを作るだけだ。毎年少しずつ作っていくという姿勢で進めていく。

## 3. 教育の方向性について

到達型・達成型の目標から方向目標へシフトすべきだ。変化の激しい社会においては、目標を固定的に定めた、到達型・達成型の評価はなじまない。そこまでしか達成できていないけれども、目指す方向が間違っていなければ、それでいい。幅を持たせた方向目標を大事にしたい。

学習指導要領の総合的な学習の時間編に、基礎・基本の知識・技能の習得と活用を軸とした学びのサ

イクルが示されているが、ひとつ抜けていると思う。学びを子ども自身が、自分事としてとらえることで、学びのサイクルがはっきりしてくる。

学習規律を守らせ、ベーシックドリルだけやっていけばいいというのは時代遅れだ。子どもの学びに火をつけることが大切（出会う・気づく・問題意識をもつ）だ。子どもを本気にできる教員になってほしい。課題の設定をきちんとやれば、子どもの学びは向上していく（しないとはい回るだけで終わる）。

- ・具体的な支援を指導案に書き込める先生が「できる教員」
- ・子どものつぶやきをうまく拾うことができる先生
- ・五感を働かすことができる場面を設定する。

指導書に書いてあることは、一般的なことばかりで、子どもを本気にできない。切実感のある課題、五感を働かせることができる体験的な学習によって、学びが他人事じゃなくなる。子どもの学びに火をつけるために

- ・どのような事実とどのように出会わせるのか。
- ・そこに驚きはあるのか。えーっという驚きが必要
- ・疑問をカードに書いてクラスでまとめて学習課題にする。

うまい火の付け方なんて、だれもができるわけではない。いつもそんな授業ができるわけではない。3年間くらいかけると年間の主な指導計画ができてくる。発表の場を作ってあげると子どもは頑張る。学校全体で取り組み、発表の場を見合うことで、上学年の学習に対する「あこがれ」、下学年から見られることによる「高学年としての自覚」により、毎年、発表のレベルがあがっていく。

『子どもの学びに火をつける』際の3つのステップ

① <問題に気づかせる>	② <火をつける>	③ <テーマを決める>
1) 体験活動や提示資料をもとに基本的な事実と出会う 2) 体験したり資料を見たりしたことから、多様な気づきや感想などをもち、それを共有する	3) 教師が提示したり、子どもが調べたりして出合った矛盾する事実や意義をつく語や資料等から疑問を感じ、書き出す <b>事実との出会わせ方が重要!</b>	4) グループや学級全体で疑問を出し合い、分類・整理してまとめ、学習問題をつくる 5) 問題について、自分なりの予想をする
楽しみ・憧れ・共感	それらをひっくり返す	

主体的・対話的で深い学びについて = 『子どもの学びに火をつける』を合言葉に問題解決的な学習過程づくり（授業づくり）

- ・「子どもの学びに火をつける」ことができない教師は2020年以降は転業まで覚悟して学び直すこと。
- ・一人の教師が、同じ単元を毎年授業できるわけではない。授業用の資料・活動のさせ方・依頼の手紙文、作品例など学年・単元名の入ったフォルダを作り、共有する。それによって、だれもが互いの実践を共有すること。

・うまい火のつけ方なんて、だれもができるわけでない。いつもそんな授業ができるわけでない。一つの学年で、一年間に一つの単元の、導入から終末まで開発できたら、それで十分。3年間くらいかけると年間の主な指導計画ができてくる。それがカリマネにもなる。

子どもたちの生きていくこの世界は

1. 情報機器の発達により、世界がつながり、
2. 私たちの世界は大きく変化している。
3. この世界を後戻りさせることはできない。
4. そして、まだまだ変化は続きそうだ。
5. 変化は、加速度的に速くなりそうだ。
6. 社会の持続可能性が危うくなっている。
7. □ だけではうまくやっつけいけない。

